

2022年6月19日 説教「賜物を生かす」

マタイの福音書 25章 14～30節

25章の終末の再臨に関する、二つ目のたとえ話を学んでいきます。

### 1. 二番目の天の御国のたとえ (14～18節)

- ①財産を預け (14～15)「天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。彼はおのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。」再臨に関する、天の御国のたとえ話の、第一は花婿を待つ十人の娘のことでした。第二は、旅に出る人が、三人のしもべに自分の財産を預けて行くたとえ話です。三人に預けられた分はそれぞれ、五タラント、二タラント、一タラントでした。
- ②タラントを用いたしもべ (16～17)「五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントをもうけた。同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。」タラントは「はかり」という意味ですが、通貨の単位でもあり一タラントは6000デナリ。一デナリが一日の労賃です。時代も国も異なりますが、仮に一デナリを五千円とすれば、一タラントは3000万になります。五タラント預かった人は1億五千万ほどを商売に投資して、同じ額ほどを儲けたのです。また、二タラントを預かった人は何らかのかたちで、同じほどの額を儲けたのです。
- ③隠したしもべ (18)「ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。」ところがです。一タラントをあずかった人は何をしたかという、地面を掘って穴をつくり、そこにそのお金を隠したのです。6000デナリですから、高額です。それをそっくり隠したのです。減らさないという面では賢いと思われるかもしれませんが。

### 2. 忠実なしもべ (19～23節)

- ①主人の清算 (19)「さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。」ここでの主人の帰還については、「突然」ということに強調点はなく、「よほどたってから」とあります。ここで注目されているのは、三人のしもべが、その期間にどのように預かったタラントを用いたかについての清算がなされるのです。
- ②主人にほめられ (20～21)「すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実であったから、私はあなたにたくさんのお金を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」第一に五タラントを預けられたしもべは、五タラントもうけたことを伝えま

す。主人は五タラントもうけた者に「よくやった。良い忠実なしもべだ。」とほめてくださいました。そして、さらに多くの物を預けられたのです。その理由は、わずかな物に忠実であったからとあります。決してわずかな額ではありませんが、与えられただけのタラントを、賢く用いたことが評価されているのです。彼にとって、光栄だった事は、主人が喜び、「ともに喜んでくれ」といわれたことでした。主人はお金が増えたことではなく、しもべの忠実さを喜んだのです。

③彼もほめられ(22~23)「ニタラントの者も来て言った。『ご主人さま。私はニタラント預かりましたが、ご覧ください。さらにニタラントもうけました。』その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」次にニタラントを預けられた者の清算です。彼もニタラントをもうけたことを伝えました。いただいた言葉は、五タラントを預けられた者と同じでした。

### 3. 賜物を用いない人 (24~30 節)

①主人への批判(24~25)「ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかりました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』」最後に一タラント預かった者が主人の前に出ました。そして、主人に対する不信も交えながら伝えます。つまり、主人が種をまかない所からも収穫を求め、自らは手を汚さずにお金を集めようとするひどい方だとわかりました、と主人を批判します。その結果、彼は怖いので、それを地中に隠しておいたので、それを今、持ってきたというのです。

②怠け者のしもべ(26~28)「ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰ってきたときに、利息がついて返してもらえたのだ。だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』」主人は彼に、「悪い怠け者のしもべだ」と退けた上で、「たとい私が蒔かない事から刈り取り、散らさない所から集めると者だと思ふなら、そのお金を銀行に預けておけば良かったではないか。そうすれば、利息がついただろう」と言われました。今日のような銀行ではありませんが、両替屋が金の保管や貸付をし、利息も与えていたようです。主イエスの言おうとする点は、少しでもタラントを用いるということでした。

③暗やみに追い出され(29~30)「だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ぎしりするのです。」彼は一タラントお取り上げられ、失ってしまいました。十タラントにした者はそれを得てさらに豊かになりました。イエスは役に立たぬしもべを暗やみに追い出さなさい、厳しい言い方をされています。そのしもべは泣いて歯ぎしりをするようになるのです。

#### 《結論》

マックス・ウェーバーという人に「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本があります。長老教会の源流にある神学者ジョン・カルヴァンの考え方が、資本主義の精神に大きな影響を与えたというのです。今朝の主イエスのたとえ話にも、お金を投資して利益を得るという面や、銀行にお金を預けて利息を得るといふところが出ています。こうしたたとえを、主が用いられたところには、主ご自身が、そうしたあり方を否定はしていないということが、ある面ではいえるでしょう。

そもそも、このたとえ話は、タラントという通貨のことが語られていますが、

これは人への神の賜物のことが言われているのです。タラントという言葉がありますが、普通は才能と訳されていますね。神様から与えられたタラントつまり賜物を生かして用いることについて語られているのです。

それではどうして、再臨のことが語られるなかで、タラントのことが述べられているのでしょうか。それは、主の再臨前に私たちができることは、与えられた賜物を用い、活かし、神の栄光が現れわされることにあるからです。主は、再臨までに、神の賜物を用いて歩いていくことが大切だと教えておられるのです。24章の末尾には「忠実な賢いしもべ」ということが教えられました。そこでは、人の目に左右されずに、主を意識して歩むことが教えられていました。小さい事であっても忠実に、終末を意識しながら、今なすべきことを賢く行っていく生き方が示されています。その面で、5タラント、ニタラントを任された者たちは、それを果たそうとしているのです。ところが、一タラントを任された者は、保身にとらわれています。主人に対する批判はあっても、主人に喜んでいただくという心が乏しいのです。

私たちはこの御言葉を受けて、どうしたら良いでしょうか。賜物を用いるとはどのようなことでしょうか。御霊の賜物については第一コリント12章にあります。そこでは体の器官にたとえて教えられています。手、足、頭、目、耳、かっこの良い器官、見栄え

のしない器官・・・。しかし、どの器官が勝っているというわけではありません。頭は大事ですが、足の裏も大事です。背中も、爪も大事です。大切なことは、それぞれの器官がその役割を全うしていくことです。そうすると、体は全体として麗しく保たれることになるのです。教会の中にあっては、目立つ務めもあれば、そうでもない場合もあるでしょう。与えられていることが、大きい場合もあれば、小さい場合もあるでしょう。しかし、大事なことはその賜物が十分に用いられていくことなのです。

ある人は言うでしょう。自分には何も賜物がないのですと。しかし、生きていくこと自体が賜物です。主の前に、小さなことでも忠実に事をなしていくことはタラントを用いることとなります。それを隠してはならないのです。用いたいのです。それが再臨の主をお迎えするために、主が喜ばれることなのです。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」と主に言っていたきたいですね。